



TITLE:

六朝の謝啓について

AUTHOR(S):

道坂, 昭廣

CITATION:

道坂, 昭廣. 六朝の謝啓について. 中國文學報 2005, 69: 1-45

ISSUE DATE:

2005-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177957>

RIGHT:

六朝の謝啓について

道 坂 昭 廣

京都大學

ここで論じようとする謝啓とは、啓というジャンルの一要素が特化したもので、六朝特に梁代になって急増した。^①

文學は、個人更には社會の內的欲求と必要性によって生み出されたものである。それゆえ、文學を構成する様々なジャンルの消長は、その時々の人間社會の状況を反映しているといえよう。謝啓もまたそれを必要とする人間の欲求と、それを文學の一ジャンルとして認知しようとする社會の状況があつてはじめて、急増という事態が生じたと考えられる。謝啓というジャンルを考察することにより、六朝時代の文學の特色と、文學を支えた人間・社會の關わりを説明する手がかりを得ることができないだろうか。

六朝の謝啓について（道坂）

謝啓の特色と、その急増の意味について考えてみたい。

一

考察の對象とする謝啓は、文學史においてジャンルとして確立しているとは言えないかもしれない。^②謝啓とは現在の言葉で言えば禮狀のことである。『文心雕龍』奏啓篇に「晉自り來（の）盛んに啓し、用は表・奏を兼ね。政を陳べ事を言うは、既に奏の異條にして、爵を譲り恩を謝するは、亦た表の別幹なり。」（訓讀は興膳宏『文心雕龍』（筑摩書房昭和四三年）による）とあり、啓の文學的役割のなかに、既に禮狀の要素が含まれていたことを示している。『文心雕龍』は、漢代には景帝の諱を避けて「啓」という言葉を用いなかったとし、引用部分に言うように、禮狀については他に表のジャンルも擔當したことを指摘している。^③

ジャンルに關わらなければ、いわゆる禮狀が中國文學史に登場するのは比較的早い。例えば、漢代には既に、哀帝「上書謝爲皇太子」、霍光「病篤上宣帝書謝恩」（篇名はともに嚴可均『全漢文』による）、谷永「謝王鳳書」（篇名は「藝

文類聚』による。以下特に斷わらない場合は、『藝文類聚』『初學記』に載る篇名である）などがある。これらはみな官位を與えられたこと、領地を與えられたことに對する謝禮の文書であり。皇帝（谷永の場合は權力者）に向かつて「恩を謝する」ものである。このような敘任に際しての禮狀などは『文心雕龍』が指摘するように、啓のジャンルでも作られるようになり、六朝時代またそれ以降ずっと作られ續ける。これらは公的世界に關わる禮狀と言えよう。その一方で、個人の結びつきから生まれる禮狀も作られていたと考えられる。前者に對して、私的世界の禮狀と言うべきものである。公的禮狀が主に朝廷に捧げられ、公開を前提としていたのに對し、私的世界の禮狀は、作者（手紙の書き手）と讀者（手紙の受け取り手）間で理解できればよく、他の第三者を讀者として意識していない。そのため、この種の手紙は普遍性をもたず、後世に残る可能性は低かった。ただそれが作られていたであろうことは、現代の我々の常識から考えても當然であるし、^④中國でもその存在を示す文章の斷片が残っている。

「義之頓首、たまもの 賜を得て、意の至れるを知る。諸君皆な困乏し、常に之れ無きを想う。此の煩損を作すに緣る無し。今 付還す（義之頓首、得賜、知意至。諸君皆困乏、常想無之。無緣作此煩損。今付還）」（王羲之「得賜知意至帖」『右軍書記』）。王羲之が何か（之）を誰か（諸君）から贈られたが、受け取らなかつたという手紙である。王羲之が誰に何を贈られたのか、彼と相手だけしか分からない。王羲之は他者を讀者として想定しはいなかったであろう。「白石枕、殊に佳物、深く卿の至りに感ず」（『白石枕帖』『三王帖』）も、禮狀の一部であろう。特に文飾の跡もなく、素直な表白であり、「卿」が誰であるかは、もちろん分からない。^⑤

これらは王羲之の筆跡であつたがゆえに、傳えられたと考えるべきであろう。一讀して明らかのように、不特定の讀者を意識した作品ではない。しかし、物を贈られ、それに對して禮狀を書くということが、古代中國においてもやはりあつたという證據とすることはできよう。ただ、六朝時代になつての謝啓の急増とは、公的な禮狀ではなく、このようなこれまで文學の表面に現れてこなかつた、物品を

贈られたことに對して作られた禮狀の量によつて感じられる事態なのである。本稿が考察の對象とするのは、物を贈られたことに對する禮狀としての謝啓である。

この種の禮狀が、なぜ洗練され、文學作品として登場してきたのか。中國文學には、民間で生まれた文藝が、知識人に取り上げられ文學に成長するという發展の型がある^⑥。しかし謝啓の場合、もともとが文字をもつ知識人のなかで行われていたものが、彼ら自身によつて文學性を付與されたと考えられる。どのような契機から、文學の世界に浮上することになったのか。またそれが、なぜ六朝、梁代であつたのだろうか。

謝啓を見ると、贈られた物は、果實や肉など食物、錢や米・絹など經濟的價值ももつていた產品、衣服や調度品、さらには邸宅など多種多様である。しかし、それぞれの謝啓の中で述べられているように、禮狀が作られたかどうかはさておき、それらの物は過去に贈られたことがないというような特別な物ではない。ただ、そのうちでも日常生活に密着した實用的な產品は、錢が口にすることをほぼ

かられ阿堵物と稱されたことに象徴されるように、貴族に時代にあつては、俗な物であり、特に詩を中心し、文學においては題材となりにくいものであつた。見方を變えれば、謝啓は禮狀を文學の一ジャンルにただけでなく、表現の領域を廣げる上でも貢獻したと思われるのである。

以下、幾つか謝啓を取り上げて見てみよう。

謝東宮賜柿啓

梁簡文帝

懸霜照采、凌冬挺潤、甘清玉露、味重金液。雖復安邑秋獻、靈關晚實、無以疋此嘉名、方茲擅美。

霜に懸かりて照采、冬を凌ぎて挺潤たり、甘きは玉露より清く、味は金液より重し。復た安邑の秋獻、靈關の晚實と雖も、以て此の嘉名に疋^ない、茲の擅美に方ぶる無し。

『藝文類聚』八十六

一・二句は柿の艶やかな色合いを、三・四句はその味について言う。この四句は柿そのもののに對する描寫である。

ただ、「玉露」「金液」を對照として言及される三・四句は、要するに美味であると言っているだけであつて、その味覺を具體的に描寫しているわけではない。^⑧五句から八句は典據を使用している。「安邑秋獻」は『史記』〈貨殖傳〉の「安邑千樹棗」を典據とし、「靈關晚實」は左思「蜀都賦」の紫梨を意識していると思われる。^⑨かの安邑の棗や蜀の紫梨といった名高い果實でさえ、この柿には及ばないというのである。

A については甲より優れ、B については乙を越えると對句で表現する三・四句は、その物がもつ特色を描寫する方法として用いられている。この表現は、食物を贈られたことに對する謝啓では他にも、「味過淪鳳、珍越屠龍」(劉孝綽「謝安成王寶祭孤石廟胙肉啓」)、「味重新城、香踰澇水」(庾肩吾「謝湘東王寶米啓」)、「珍韜江浦、味越茗川」(周弘正「謝勅資紫鮮啓」)などと用いられている。さらに食物に以外でも、器物では「輕蹠雪羽、絮竝霜文」(王融「謝竟陵王示扇啓」)や「珍窮貨貢、製極範金、用貴寶樽、文包龍鼎」(劉孝儀「謝鄱陽王賜銀鉢啓」)、衣服では「物華雉毳、名

高燕羽」(梁簡文帝「謝東宮賜裘啓」)、その他、「舞越兩駢、驅同八駿」(劉孝儀「謝豫章王賜馬啓」)、「色艷蒲桃、采踰聯璧」(劉孝威「謝寶錦被啓」)と、謝啓では頻出する表現である。このレトリックは「便ち彼の金衣を削り、茲の玉液を咽むを得れば、甘きは萍實を踰え、冷きは水圭(一作冰壺)に亞ぐ(便得削彼金衣、咽茲玉液、甘踰萍實、冷亞水圭)」(劉孝儀「謝晉安王賜甘啓」)が最も直接的であるが、劉楨「瓜賦」(『初學記』一〇)の「甘逾蜜房、冷亞冰圭」という言い方を踏まえているのである。^⑩

謝啓は、過去のいわば安定した表現を踏襲している場合が多く、對象に密着し、より適切な新しい表現を開拓することには、必ずしも熱心でないように感じられる。様々な物品の描寫に廣く應用されるこの表現などは、そのことを端的に示している。

續く五句から八句は、あるカテゴリーのなかで、その物が占める位置を表現しようとする。このカテゴリーの中ではこれまで甲や乙がすばらしいとされていたが、贈られた物には及ばないと主張するのである。この表現も謝啓には

よく見られる。

謝給藥啓 劉孝綽

一物の微、遂留亭育、名醫上藥、爰自城府。雖巫咸視診、岐伯下鍼、松子玉漿、衛卿雲液、比妙競珍、實云多愧。

一物の微、遂に留めて亭育され、名醫の上藥、爰に城府自りす。巫咸の視診、岐伯の下鍼、松子の玉漿、衛卿の雲液と雖も、妙を比べ珍を競えば、實に多愧と云わん。

『藝文類聚』八一

本來天上にあるような藥がこの世にあると、まず貴重な藥であることをいう。五句目からはどのような名醫の診斷・治療、仙人の藥もこれには及ばないという。贈られた藥が最上級であることを言うために、典據が用いられている。

他にも、例えば「白玉照采、方斯非貴、珊瑚挺質、匹此

六朝の謝啓について（道坂）

未珍」（梁昭明太子「謝勅寶水犀如意啓」）は、水犀の角でできた如意の白い輝きと堅い質を白玉、珊瑚を對照にして表現する。「雖復鄴（業）殿鳳銜、漢朝魚網。平準桃花、中宮穀樹。固以慙茲靡滑、謝此鮮光」（劉孝威「謝寶官紙啓」）は、過去の王朝の有名な紙も、自分が頂いた紙の滑らかさ白さには一步譲ることになろう、また「伏以狐裘熊席、徒負舊名、玄豹青狸、未能適體」（張纘「謝皇太子寶果然褥啓」）も、贈っていたいた「オナガザル」の敷物に較べてみれば、いろいろな獸の敷物はみな虚名を誇るだけで、用途としても劣っていると、自分の頂いた物こそが最高であることを表現している。

以上二種類の比較の表現は、謝啓において非常によく見られる。ともに、贈られた物品が、過去の同類の物よりも優れているということを述べる爲に用いられているのである。

これとは別に、自分が受けた恩寵や榮譽は、過去の同じ恩寵・榮譽を得た人物よりも上であると主張する表現もある。これは、贈るという行爲への稱賛である。

謝敕賚善勝威勝刀啓

梁簡文帝

冰鍔含采、雕琰表飾、名均素質、神號脫光。五寶初成、曹丕先荷其一、二（善）勝今造、愚臣總被其恩。錫韓非之書、未足爲比、給博山之筆、方此更輕。

冰鍔は采を含み、雕琰は飾を表わす、名は素質に均しく、神は脫光と號す。五寶初めて成り、曹丕先ず其の一を荷ない、二勝の今造は、愚臣總べて其の恩を被る。韓非の書を錫うも、未だ比と爲すに足らず、博山の筆を給さるも、此に方ぶれば更に輕し。

『藝文類聚』六〇『初學記』二二

ここに連ねられている典據から考えると、梁簡文帝が自分が皇太子に立てられた際に、皇帝より刀を與えられたことに對する禮狀と思われる。一・二句は與えられた刀のきらびやかな裝飾をいう。「素質」は魏文帝の寶刀の名、「脫光」は傳説の名刀。「五寶」の二句は、曹植の「寶刀賦序」(『藝文類聚』六〇)に「建安中、魏王、命有司造寶刀五枚、……太子得一」とあり、曹丕は五振りの寶刀の一を得ただ

けであるのに、自分は陶弘景が獻上した二振りをともに頂いたという。同じ皇太子であっても、曹丕以上の名譽を得たと、自分の恩寵を歴史の中において誇らかに述べる。

同じ皇太子という立場で、同じく寶刀を與えられた曹丕より、自分はより恩寵を得ているという句を引き受けて、最後の四句は、晉の元帝が皇太子に『韓非子』を與えたこと、また立太子にあたって、「漆筆四枝、銅博山筆牀一副」が給されたという故事を踏まえ、^⑬そんなものは、自分の足下にも及ばないと誇る。過去において皇太子に與えられた物を列舉し、それ以上と自分の恩寵を誇っているのである。他にも「雖復魏宣二端、豈能比今茲賜、廣微四縫、未足方其華飾。既受非望之恩、方貽匪服之誚」(周弘正「謝敕賚烏紗帽等啓」)は、過去に喧傳された衣冠でさえ、これに較べれば色あせる。そのような素晴らしい物を圖らずも自分は贈っていたいたと言う。「亦有太沖嗟其夏成、子建暢其寒熱。潘園曜白、孫井浮朱、竝見重於昔時、而霑恩於茲日」(劉孝儀「謝始興王賜柰啓」)も、過去に「柰」を贈られたり(謝啓の先聲として、曹植に「謝賜柰表」があることは後の

紹介する)、果物を下賜され、恩寵を示されたことがあったが、自分も同じくらいの名譽を得たという。

これらとは視點を逆轉させて、「臣才愧昔人、恩同往昔。豈宜妄荷、重增疵吝」(劉孝儀「爲王儀同謝宅啓」)と、及びもつかない自分が、過去の優れた人物と同等の恩典を得たと表現する謝啓もある。この謝啓はこの句の前に、晏嬰が低濕地にある狭い家に住んでいたので、景公が良い土地に邸宅を與えようとした故事など、邸宅の下賜に關わる典據を連ねた對句をうけて、このように總括し、恩典に感謝している。

謝勅賜御裘等啓

王融

雲衣降授、仙裾曲委。榮振素里、澤駭蓬心。昔漢帝解裘、不獨前寵、曹王褫帶、復降今恩。

雲衣 降授され、仙裾 曲委さる。榮は素里を振わし、澤は蓬心を駭かす。昔し漢帝の裘を解きしは、獨だ前の寵のみならず、曹王の帶を褫ときて、復た今恩を降す。

『藝文類聚』六七

六朝の謝啓について(道坂)

典據を探しあてられないものもあるが、過去の恩寵が再現されたという最後の四句は、先に指摘した表現の一種である。しかし三・四句目の、すばらしい下賜品によって自分が住む賤しき邊り、賤しき人々の評判になったというのは、本來このような物を下賜されるはずのない自分ということを示しつづ、相手の恩典を強調しているのである。他にも「安期舊美、安息高名、臣金馬之榮、未獲趨奉、方朔之賜、遽降洪恩」(周弘正「謝梁元帝寶玉門裘啓」)や、「敬閎籀篆、側觀硯功。張衡慚奇、金瓊羞麗。臣夙乏翰能、素謝篇伎。空賁恩輝、徒隆慈飾」(江淹「建平王謝賜石硯等啓」)なども、どれも過去の例に照らして自分などは、このような物を贈られる資格がないのという言い方で、破格の恩寵であることを表現している。

謝啓の表現の特色は、見てきたように典據の多用にある。しかも典據のほとんどすべてが比較の構造の中で用いられている。比較によって示そうとしていることは大きく二つある。贈られた物についての稱贊と、贈ってくれた相手、或いはその行爲それ自體に對する稱贊である。前者は、味

や裝飾など、贈り物がもつ機能・特色の優位を示すため、その物が同類の他の物よりも優れているという表現がなされた。後者では、これまで同様の贈り物を贈られた人物よりも大きな恩典を與えられたという表現。過去においては優れた人物に對してのみ贈られたのに、遙かに及ばない自分が同様の贈り物を貰ったと、相手の恩典の素晴らしさを言うために比較の表現が用いられていたのであった。典據を用いることによって、贈られてきた物が、仙界の或いは歴史的背景をもつ品物であるかのように想像昇華され、一舉に抽象化される。これは典據の一般的な効果であるが、謝啓の場合、實際に目の前にあるものが、物品としては變哲もない極めて形而下的な品物であることが多いため、その効果は大きい。さらに比較の構文は、その効果をより高めているのである。

謝啓は、文學者それぞれが個別の表現を追求するというより、皆がほとんど共通した表現を用いていた。そのような常套的とも言える表現を通して伝えようとした内容もまた、上述したように共通していた。六朝において謝啓とい

うジャンルで求められたのは、味や美しさなどその物の特色を個別具體的に描寫することや、作者独自の表現ではなく、典據によって抽象的にその物や物を贈るといふ行爲の優越性を表現することであつたのではないかと考えられるのである。

さて、このような謝啓、即ち禮狀は、なぜ梁朝において隆盛を極めることになったのか。梁に至るまでの状況を概觀したうえで、謝啓と時代の文學狀況との關わりについて考えてみたい。

二

附録の謝啓一覽から明らかなように、物を贈られたことに對する禮狀として、現在見ることができると最初のものは、魏の曹植の「謝賜柰表」である。

謝賜柰表

曹植

卽夕、殿中宣詔、賜臣冬柰。詔使溫暄、夜非食時、而賜見及。柰以夏熟、今則冬至。物以非時爲珍、恩以絕

口爲厚。

卽夕、殿中より宣詔さる、臣に冬奈を賜うと。詔に溫めて啖わ使めよと、夜は食時に非ざるに、見及を賜う。奈は夏を以て熟するに、今は則ち冬至なり。物は非時を以て珍と爲し、恩は口に絶つを以て厚きと爲す。

『藝文類聚』八六

文字に異同があるが、^⑮ここで言っていることは、珍しい物を下賜されたということである。これまで見てきたような複雑な表現はなく、「物以非時爲珍、恩以絶口爲厚」と、極めて素直に感謝を表明している。

この後、みな一部分が傳わっているだけであるが、晉代には王衍「謝表」、孫楚「謝賜障日牋」と二篇の禮狀がある。特に後者に、「大恩賜鄣日、其器雖小、而禮遇甚宏。

昔衛綰賜六劍、珍而不用。楚雖不敏、且受而藏之」と、後の謝啓につながる文飾を用いているのが注目される。宋代に入っても江夏王の劉義恭や王弘、鮑照にほんの二句程度の斷片が傳わるだけで、所謂公的世界である敘任の際など

六朝の謝啓について（道坂）

に書かれた長大な禮狀があるのに對し、ほとんど無いに等しい状態が続く。ところが、南齊に入るとその狀況が一變する。王融や謝朓などにある程度まとまった量の謝啓が傳わるようになる。ここでは謝朓の謝啓を擧げておこう。

（謝）隨王賜左傳啓

昭晰殺青、近發中汗。思（恩）勸挾策（冊）、慈勗下帷。朓未窺（觀）山笥、早惜河籍。業謝專門、說非章句。庶得既因（困）而學、括羽瑩其蒙心。家藏賜書、竄金遺其貽厥。披覽神勝、吟諷知厚。

昭晰たる殺青、近ごろ中汗を發す。思い（恩）は策（冊）を挾むを勧め、慈は帷を下すを^{はげ}励ます。朓は未だ山笥を窺^くわず（觀ず）、早に河籍に^く憎し。業は専門に謝し、説は章句に非らず。庶わくは既に因りて（困じて）學ぶを得、括羽して其の蒙心を瑩^{あきらか}にせん。家に賜書を藏すれば、竄金 其れ貽^{いけつ}厥に遺さんや。披覽すれば神勝り、吟諷して厚を知る。

『藝文類聚』五五・『初學記』二二

典據を連ね、『左傳』が自分のような學問の無い者に贈られたと感謝している。その構成は、梁の謝啓と異なるところがない。

南齊の謝啓で注目したいのは、謝啓が、この時期から明確な姿を現しはじめた文學の保護者たち、具體的には竟陵王や隨王^⑮などに向けて書かれていることである。謝啓は、六朝文學の基盤となったサロンの形成とともに、文學の世界に登場してきたのである。そのような觀點から謝啓を見直してみると、謝啓もまたサロン文學の一種と考えることができる。

六朝文學を代表し、この時期のサロン文學の典型とされるのは、詠物詩であり後には宮體詩である。それら、特に詠物詩は、サロンを創作の場とし、主にサロンの主催者からテーマを與えられた^⑰。謝啓も當然ではあるが、物が贈られて始めて作られる。言い換えれば、外から突然主題が與えられ作品が作られるのである。このような外發的動機によって、與えられたテーマで作品を作るといふ、完全に受動的な文學製作は、サロン文學の特色の一つである。そこ

で、謝啓の同時代における文學的役割と特色を明確にするために、詠物詩と謝啓とを比較してみよう。

謝啓の對象となるものと、詠物詩のそれとは必ずしも完全には重ならない。先に指摘したように、食物など生活色の強い物は、あまり詠物詩の題材とはならなかったようである。ここでは、同じ物を兩ジャンルがどのように表現しているかについて見てみよう。

謝竟陵王示扇啓

王融

竊以六翻風流、五明氣重、若此圓綯、有兼玩實。輕踰雪羽、絜竝霜文。子淑賞其如規、班姬儷之明月。豈直魏王九華、漢臣百綺。況復動製聖衷、垂言炯戒。載摹聽眎、式範樞機。

竊かに以えらく六翻は風流、五明は氣重し、此の若き圓綯、玩實を兼ねる有り。輕きは雪羽を踰え、絜きは霜文に竝ぶ。子淑は其の規の如きを賞し、班姬は之を明月に儷^{なづ}ぶ。豈に直だ魏王の九華、漢臣の百綺のみならんや。況んや復た製は聖衷を動かし、言は炯戒を垂

るるをや。載は聽眛を摹し、式は樞機を範とす。

『藝文類聚』六九

謝寶扇啓

梁簡文帝

臣綱啓。傳詔饒僧明奉宣敕旨、垂寶細綾大文畫柳蟬山扇一柄。文筠析縷、香發海檀。肅肅清風、卽令象簾非貴、依依散彩、便覺夏室含霜。飲露青蜩、應三伏之修景、群飛黃雀、送六月之南風。蔽日垂陰、薰澤慙采、浮涼滌暑、蘋末愧吹。聖人造物之巧、俯萃庸薄、王府好玩之恩、於茲下被。頂戴曲私、伏增欣躍。謹奉啓事謝聞。謹啓。

臣綱啓す。傳詔饒僧明 敕旨を奉宣し、細綾大文の柳蟬山を畫きし扇一柄を垂寶さると。文筠 縷を析ち、香は海檀に發す。肅肅たる清風、卽ち象簾をして貴きに非ざら令め、依依たる散彩、便ち夏室に霜を含むかと覺ゆ。露を飲む青蜩は、三伏の修景に應じ、群飛する黃雀は、六月の南風を送る。日を蔽い陰を垂すは、薰澤 采を慙じ、涼を浮べ暑を滌すは、蘋末 吹を愧

六朝の謝啓について（道坂）

ず。聖人 造物の巧、俯して庸薄に萃まり、王府 好玩の恩、茲に下被さる。曲私を頂戴し、伏して欣躍を増す。謹んで啓事を奉じ謝聞す、謹んで啓す。

『初學記』二五

二篇とも扇を贈られたことに對する禮狀である。梁簡文帝の謝啓の「飲露青蜩、應三伏之修景、群飛黃雀、送六月之南風」の部分は、典據を用いているというより、直接には扇に描かれていた繪の描寫であらう。しかし王融の「輕踰雪羽、絜竝霜文」は先に指摘したが、梁簡文帝の「肅肅清風、卽令象簾非貴、依依散彩、便覺夏室含霜」や「蔽日垂陰、薰澤慙采、浮涼滌暑、蘋末愧吹」も、これまで見てきたように比較の構造が用いられており、標準的な謝啓と言える。一方、詠物詩にも扇をテーマとしたものがある。

詠畫扇詩

鮑子卿（一作高爽）

細絲本自輕

細絲 本 自ら輕し

弱彩何足眛

弱彩 何ぞ眛みるに足らん

直爲發紅顏 直だ紅顔を發するが爲に

謬成握中扇 謬りて握中の扇と爲る

乍奉長門泣 乍ち長門の泣を奉じ

時承柏梁宴 時に柏梁の宴を承く

思妝開已掩 思妝は開くも已に掩われ

歌容隱而見 歌容は隱るるも見わる

但畫雙黃鵠 但だ雙黃鵠を畫け

莫作孤飛鵲 孤飛の鵲を作す莫かれ

『玉臺新詠』五

賦得轉歌扇詩

庾肩吾

團紗映似月 團紗 映せば月に似

蟬翼望如空 蟬翼 望めば空の如し

迴持掩曲態 迴り持して曲態を掩い

轉作送聲風 轉り作して聲風を送る。

『藝文類聚』六九

二首のうち、特に鮑子卿の詩は典故を多用している。し

かし典故を用いて描き出そうとしているのは、扇を用いた人間、女性である。庾肩吾の詩も、前二句は扇の様子であるが、後二句は扇を使う人間に焦點を當てている。兩詩とも扇がもつイメージに反應し、その背後にある物語を紡ぐ方向に表現が展開している。この兩詩と較べたとき、謝啓が用いる典故は、物語を展開するためではなく、その機能の優秀性を示すための裝置としてある。その爲、謝啓は總體として敘事的な色彩が強い。

謝啓と詠物詩はともに典故を使用しても、描き出される世界が大きく異なっている。そのことは、それぞれのジャンルで表現の目的が別のところにあることを示している。それを端的に示すのが、次の例である。

謝東宮寶枕啓

梁元帝

泰山之藥、既使延齡、長生之枕、能令益壽。黃金可化、

豈直劉向之書、陽燧含火、方得葛洪之說。況復重安珉

瑁、獨勝瑰材。芳松非匹、柁榴未擬。

泰山の藥、既に齡を延さ使め、長生の枕、能く壽を益

さ令む。黄金化す可きは、豈に直だ劉向の書のみならんや、陽燧の火を含むは、方に葛洪の説を得ん。況んや復た重安の玳瑁、獨り瑰材に勝るをや。芳松は匹に非らず、柁榴も未だ擬せず。

『藝文類聚』七〇

文章の繋がりに分かりにくい所もあるが、ここに連ねられた典據は、すべて枕の機能をいう爲にある。これまでのいろいろな長壽の方法、そして不思議な仙術もこの枕には込められているということを言っているのであろう。

詠柁榴枕詩

許遙

端木生河側 端木 河側に生じ

因病遂成妍 病に因りて遂に妍を成す。

朝將雲髻別 朝に雲髻と別れ

夜與蛾眉連 夜 蛾眉と連なる

『玉臺新詠』一〇

この詩の前二句は、漢賦以來の表現法を踏まえ、枕になる以前の素材について述べ、後二句は、それが枕に加工されてからの使用者（女性）との關わりを述べている。四句の短い詩であるが、ひとつの物語を構成している。

詠物詩は對象から、あるイメージを膨らませようとする。典據を利用するのも、その物がもつ物語を導く爲であつた。しかし謝啓が典據を列擧するのは、現實の目の前の物を歴史的空間的な地平に併置し、それが史上稀に見る優れた物・事であるということを説明する爲なのであつた。

最後に、梁武帝の「苦旱詩」に和した詩と、その詩を贈られたことに對する謝啓を見てみよう。詩は狹義の詠物詩ではないが、兩作には、詩と謝啓の表現の違いが如實に表れているように思われる。

謝敕示苦旱詩啓

梁簡文帝

伏以九年之水、不傷堯政、七載之旱、無類湯朝。歲弘則公田已修、農勤則我庾惟億。今者亢陽以來、爲日未久。將恐督郵不黜、失在汝南之守、曝齒未收、無傷河

南之尹。而載勞興居、仰發歌詠。無愛珪璧、有事山川。
菲飲食矣、加之以撤膳焉、中夜不寐、加之以申旦焉。
此唐虞之所闕如、軒頊之所不逮。

伏して以えらく九年の水も、堯の政を傷めず、七載の
旱も、湯朝に類う無し。歳弘ければ則ち公田已に修ま
り、農勤めれば則ち我が庾惟だ億し。今は亢陽以來、
日を爲すこと未だ久しからず。將に恐る督郵黜せざれ
ば、失は汝南の守に在るか、曝術未だ收めざれば、傷
は河南の尹に無きかと。而して載に興居を勞し、仰ぎ
て歌詠を發す。珪璧を愛する無く、山川を事とする有
り。飲食を非んぜり、之に加えて以て膳を撤せり。中
夜寐ねず、之に加えて以て申旦せり。此れ唐虞の闕如
たる所、軒頊の逮ばざる所なり。

『藝文類聚』一〇〇

奉和武帝苦旱詩

庾肩吾

陽山蛇不蟄

陽山の蛇蟄せず

如澤鳥猶攢

如澤の鳥猶お攢まる

暫息流膏雨

暫く膏雨を流すこと息む

將似怨祁寒

將に祁寒を怨むに似たり

文衣夜不臥

文衣して 夜臥ねず

疏食晝忘餐

疏食して 晝餐を忘る

絜誠同望祀

絜誠 望祀に同じく

惟馨等浴蘭

惟馨 浴蘭に等し

江蘋享上帝

江の蘋 上帝に享め

荆壁饗高巒

荆の壁 高巒を饗

繁雲興岳立

繁雲は岳に興りて立ち

蒸穴動龍蟠

蒸穴 龍の蟠れるを動かす

涓渠還積水

涓渠に積水還り

澎池更起瀾

澎池 更に瀾を起こさん

『藝文類聚』一〇〇

庾肩吾の詩は、旱魃、祈り、祈りが通じて雨が降ると、
先にみた詠物詩と同様、一種の物語のような構成になっ
ている。それに對して梁簡文帝の謝啓は、堯や殷の湯王のよ
うな聖人の世でも災害はあったが、それは治世の汚點とは

ならなかった。普段から災害の備えは充分にしてある。このちよつとした旱魃、それでも故事のように地方に人を得ていないからであらうかと、政治を省みる吾が皇帝、その祈りは、過去に及ぶものはいないと言う。特に最後の二句、古代の聖賢の名を用いてはいるが、彼ら以上という表現は、謝啓の常套表現とも言うべきものであった。

梁武帝の詩は傳わらないが、庾肩吾の詩は、雨を祈ったであらう武帝の詩を受け、雨が降るに違いないと、その詩を敷衍していると思われる。しかし、梁簡文帝の謝啓は、詩の内容ではなく、詩を作った武帝の態度を褒め稱えることに重點がある。

謝啓は、禮狀であるから、ある物が贈られたことに對して喜びを表現する。しかし、梁武帝の「苦旱詩」に對する簡文帝の謝啓に見られるように、その製作における視點は、常に相手の側にあるように思われる。そのため、作者の喜びの表現は、贈られたという事實に集中し、それを賞味してどのように美味しかったかとか、使つてみて、飾つてみてどうであったという、贈られた物に即した描寫は必要と

されなかった。むしろ贈られた物が同じカテゴリーの中で最高の物であること、また、贈られた自分の恩典が最高であるという表現がなされた。そしてその描寫方法として、類似の物品や事例を廣く過去に取材し、比較の對象としたのである。謝啓は、それらを典據として列擧するという意味で、極めて主知的な文章であつたと言えよう。

ただ、このような六朝の謝啓の書き方は、我々が禮狀に對してもイメージからすると違和感がある。いま手紙の書き方といった本を適當に開いてみると、必ず「お禮狀の書き方」といった章が立てられている。そこには自分がそれを貰つて如何に喜んでゐるか、貰つた物に即して書くという趣旨のことが祕訣として記されている。ところがそのような書き方をしてゐる六朝の謝啓は、ほとんどない。現在見ることができる六朝の謝啓の大多數は、これまで指摘したような表現方法と内容の作品なのである。

詠物詩が、六朝にあつてはほぼ共通する發想と表現で作られたように、謝啓のこのような共通性にも、ある規範のような意識が働いてゐるのではないだろうか。

三

六朝の謝啓の多くは『藝文類聚』に載録されている。言うまでもなく『藝文類聚』は類書であり、謝啓から一部分だけを抜粋して載録していることもある。¹⁹⁾しかし、それでもこの書が六朝の謝啓の保存に果たした役割は大きい。文學史的に考えると、謝啓を文學の一ジャンルとして最初に認識したのは、『藝文類聚』を編纂した唐草創期の人々であつたと言えるのかもしれない。²⁰⁾だが、そのような類書としての性格や、廣く集めることを目的とし、『初學記』ほど精選してはいないとされても、作品の載録にあたつては、自ずから選擇基準はあつたと思われる。そして、そのような基準は、實は謝啓においても働いていたと考えられるのである。『藝文類聚』にどのような謝啓が採られていないかによつて、六朝から初唐における謝啓の規範意識のようなものが逆に浮かび上がってくるのではないだろうか。

そのような觀點から謝啓一覽を眺めると、『藝文類聚』が載録する庾信の謝啓が異様に少ないということに氣ががつ

く。庾信が、六朝を代表する文學者であり、初唐の文學にまで大きな影響を及ぼしたということは贅言を要さない。『藝文類聚』も庾信の作品を一一四篇も載録している。²¹⁾ところが、こと謝啓に關しては、僅か四篇しか採らないのである。全部で十五篇が傳わる庾信の謝啓を見てみると、これまでの謝啓とはやや異なる内容が述べられている。

謝明皇帝賜絲布等啓

臣某啓。奉敕垂賜雜色絲布綿絹等三十段、銀錢二百文。某比年以來、殊有闕乏。白社之內、拂草看冰、靈臺之中、吹塵視飢。懟妻很妾、既嗟且憎、瘠子羸孫、虛恭實怨。王人忽降、大賚先臨。天帝賜年、無踰此樂、仙童贈藥、未均斯喜。張袖而舞、玄鶴欲來、撫節而歌、行雲幾斷。所謂舟楫無岸、海若爲之反風、薺麥將枯、山靈爲之出雨。況復全抽素繭、雪坂疑傾、併落青鳧、銀山或動。是知青牛道士、更延將盡之命、白鹿真人、能生已枯之骨。雖復拔山超海、負德未勝、垂露懸針、書恩不盡。蓬萊謝恩之雀、白玉四環、漢水報德之蛇、

明珠一寸。某之觀此、寧無愧心。直以物受其生於天。不謝。謹啓。

臣某啓す。雜色絲布綿絹等三十段、銀錢二百文を垂賜さるの敕を奉る。某は比年以來、殊に闕乏有り。白社の内、草を拂い氷を看み、靈臺の中、塵を吹き甑を視る。懟妻と很妾は、既に嗟き且つ憎み、瘡子と羸孫は、虛恭にして實は怨む。王人忽ち降り、大寶先ず臨む。天帝年を錫うも、此の樂しきを踰ゆる無く、仙童藥を贈るも、未だ斯の喜びに均しからず。袖を張りて舞えば、玄鶴來らんと欲し、節を撫して歌えば、行雲幾ど斷たん。所謂舟楫岸無く、海若之が爲に風を反し、薺麥將に枯んとして、山靈之が爲に雨を出す。況んや復た全く素繭を抽けば、雪板の傾けるかと疑ひ、併せて青鳧の落つれば、銀山或いは動けるかとおもうをや。是れ青牛の道士の、更に將に盡んとするの命を延ばし、白鹿の真人の、能く已に枯れし骨を生かすを知る。復た山を抜き海を超ゆといえども、徳を負いて未だ勝えず、露を垂らし針を懸くるといえども、恩を書きて盡

くさず。蓬萊謝恩の雀、白玉四環をもち、漢水報徳の蛇、明珠一寸をもつ。某の此を觀れば、寧んぞ愧心無からん。直だ物を以て其の生を天に受く。不謝。謹んで啓す。

『文苑英華』六五五

某から王人の句の前までは、贈り物を得る以前の自分たち家族の苦しい生活。そして以下は贈り物を得てどれほど喜んでゐるか、その喜びがどれほど大いさを表現するために、典據が連ねられる。まさに命の恩人のような相手に、どのようにしても恩返しをしたいけれども、自分の思いは盡くしきれないと述べる。典據を連ねた、整った駢文であることは、これまでの謝啓と同じである。しかし、この謝啓では、その品物を貰つて自分や家族がどれほど喜んでゐるか、どれほどありがたく思つてゐるかが、繰り返して表現されている。現在の我々が抱く禮狀のイメージに近いが、從來の謝啓にあった、品物や贈るという行爲に對する描寫はない。

謝趙王賁乾魚啓

某啓。蒙賁乾魚十番。醴水朝浮、光疑朱鼈、文鯨夜觸、翼似青鸞。沉復洞庭鮮鮒、溫湖美鯽、波瀾成雨、鱗甲防寒。某本吳人、常想江湖之味、及其飢也、唯資藜藿之餘。慈賁渥恩、膏腴流溢（鼈）。不勞獅子之亭、即勝雷池之長。翻驚河伯、獨不愛人、足笑任公、終年垂釣。謹啓。

某啓す。乾魚十番を賁るを蒙る。醴水朝に浮かべば、光は朱鼈かと疑い、文鯨夜觸るれば、翼は青鸞に似たり。況んや復た洞庭の鮮鮒、溫湖の美鯽、波瀾雨を成し、鱗甲寒きを防ぐをや。某は本と吳人、常に江湖の味を想うも、其の飢うるに及んでは、唯だ藜藿の餘を賁するのみ。慈賁渥恩、膏腴流溢す（鼈に流る）。獅子の亭を勞さずして、即ち雷池の長に勝る。河伯翻驚するは、獨だ人を愛さず、任公笑うに足る、終年釣を垂る。謹み啓す。

『文苑英華』六五五

この謝啓は、詠物的表現が多く、最後の句も従来の謝啓と同じく、自分の方が幸福であると誇っている。しかし一方で自身が「吳人」であり、食べたくとも食べられなかった魚を贈られたことが何ともうれしいと表現している。このような自分自身の感情の表白は、これまでの謝啓ではあまりなされることがなかった。

このような贈り物に觸發されて生じる自分自身の感情や個人的な事情の表明は、六朝の謝啓においては忌避されるものであったのではないだろうか。劉孝儀の酒を贈られたことに對する謝啓二篇のうち、『藝文類聚』が一方だけ採っていることもそのことを暗示する。

謝東宮賁酒啓

異五齊之甘、非九醞之法。屬車未曾載、油囊不得酤。試儔仙樹、葛玄泥首、才比蒲桃、孟他銜璧。固知託之養性、妙解怡神、擬彼聖人、差得連類。

五齊の甘に異なり、九醞の法に非らず。屬車未だ曾て載せず、油囊も酤すを得ず。試みに仙樹に儔うれば、

葛玄は泥首し、才かに蒲桃に比すれば、孟他は璧を銜まん。固より知る之に託して性を養えば、妙解して神を怡げ、彼の聖人に擬すれば、類に連なることを得るを羞じん。

『藝文類聚』七二

酒に關わる典據を列舉しただけのような文で、一部分だけが拔粹されたのかもしれない。ただ、五句目から八句の表現は、これまで屢々指摘した比較による表現を用いている。

謝晉安王賜宜城酒啓

孝儀啓。奉教、垂賜宜城酒四器。歲暮不聊、在陰卽慘。惟斯二理、揔萃一時。少府鬪猴、莫能致笑、大夫落雉、不足解顏。忽值瓶瀉椒芳、壺開玉液。漢樽莫遇、殷杯未逢。方平醉而遁仙、義和耽而廢職。仰憑殊途、便申私飲。未矚疊恥、已觀幘岸。傾耳求音、不聞霆擊、澄神密眊、豈觀山高。愈疾消憂、於斯已驗、遺榮忽賤、

六朝の謝啓について（道坂）

卽事不欺。酩酊之中、猶知銘荷。不任。云云。

孝儀啓す。宜城酒四器を垂賜さるの教を奉る。歲暮なほ聊からず、陰に在りて卽ち慘たり。惟だ斯の二理、總て一時に萃まる。少府の鬪猴も、能く笑いを致す莫く、大夫の落雉も、顔を解くに足らず。忽ち瓶の椒芳を瀉ぎ、壺の玉液を開くに値う。漢樽も遇う莫く、殷杯も未だ逢わず。方平は酔いて仙を遁がれ、義和は耽りて職を廢す。仰ぎて殊途に憑り、便ち私飲を申ぶ。未だ疊恥を矚ざるに、已に幘岸を觀る。耳を傾け音を求むるも、霆擊を聞かず、神を澄ませ眊を密にするも、豈に山の高きを覲んや。疾い愈え憂い消ゆは、斯に於いて已に驗あり、榮をわすれ賤をわす忽るは、事に卽きて欺かず。酩酊の中、猶お銘荷を知るがごとし。不任、云云と。

『初學記』二六

『藝文類聚』が載録しなかつたこの謝啓には、庾信と同じく、自分の感情の表白がある。前半は、年末、寂しく失

意の中にある自分の内面を表現している。^② 續いて、そのような氣持ちであるときに酒を贈られ、それを飲んで楽しみ、氣分が晴れたと、時系列に沿って自分の氣分の變化を述べている。從來通り、典據が連ねられた整った駢文である。

しかしこの謝啓は、贈られた自分に焦點をあてて作られている。庾信の謝啓と合わせて考えると、六朝末の梁に勃興し、唐初期に認識された謝啓というジャンルに對する當時の概念を見ることができるようになる。六朝の謝啓は、贈られた者がその個人的な喜びを表現することが目的ではなかつたのである。贈られた物、贈られたという事實を、どのようにすばらしいかと表現するに目的があつたのだ。

謝啓は、當初からそのような篇名が付されていたかはかなり疑問であるが、基本的に篇名に誰から何を贈られたかが記されている。それによれば、梁でも皇帝を含めサロンの主催者から贈られることが多かったことが分かる。南齊以來、謝啓は六朝のサロンを主要な場として作られたのである。サロンという場が謝啓の基盤である以上、相手と自分の間の親しさに基づいて書かれた王羲之の禮狀とは、表

現や内容に差異が生じるのは自明のことであろう。サロンの主催者に整った駢文で提出された謝啓は、王羲之の場合と異なり、公開を前提とするものであつた。もちろん公開といつても、近代的な意味ではなく、サロンに集う人々という限定はある。しかし、この意識が謝啓を文學に成長させることになつたのである。また、この前提があるがゆえに、個人的事情や個人的感情、さらには個性的表現は、排除されるべきものであつた。

このように謝啓は、表現しようとする世界は異なるが、製作動機ばかりか、目的においても、詠物詩と重なるものであつた。詠物詩が六朝サロン文學の韻文における典型とするなら、謝啓は散文における典型と言えるのではないだろうか。

謝啓は、作者の側でなく贈った相手の側に焦點をあて、兩者の間だけではなく、サロンという場での公表を了解事項として作成された。ところで次の謝啓は徐陵が陳朝にあつて作つたものである。

謝敕賁燭監（盤）賞答齊國移文啓

昔班彪草移、阮瑀裁書。馳譽當年、遂無加賞、非常大賁、始自今恩。雖賈逵之頌神雀、竇攸之對鼯鼠、漢臣射覆之言、魏士投壺之賦、方其寵錫、獨有光前。官燭斯燃、更慙良吏、霄（宵）光可學、乃會耆年。臣職居南史、身典東觀。謹述私榮、傳之方策。

昔し班彪は移を草し、阮瑀は書を裁す。譽を當年に馳すも、遂に賞を加えらること無く、非常の大賁、今恩自り始む。賈逵の神雀を頌し、竇攸の鼯鼠に對し、漢臣の射覆の言、魏士の投壺の賦と雖も、其の寵錫を方ぶれば、獨だ光前たる有るのみ。官燭斯に燃え、更に良吏に慙じ、霄（宵）光の學ぶ可きは、乃ち耆年に會すればなり。臣は職南史に居り、身は東觀に典す。謹んで私榮を述べ、之を方策に傳えん。

『藝文類聚』八〇

ちなみに徐陵の謝啓は斷片を含め七篇しか残っていないが、庾信と異なりすべて『藝文類聚』に載録されている。

六朝の謝啓について（道坂）

班彪、阮瑀が優れた實用文の作者として名を喧傳されながら、とりたてて恩賞を與えられなかったのに、自分は同様のことで恩典が與えられた。また褒美が與えられた者もこれに較べれば大したことではない。この謝啓のレトリックは、これまで見てきた他の謝啓と特に異ならない。しかし、最後の二句「謹述私榮、傳之方策」は、謝啓の公開を、明確に示すものである。さらにこの言葉から、この謝啓は贈られた自分の名譽を述べつつ、實は贈った側の恩典を顯彰する目的ももっていたということも明らかになる。

徐陵の謝啓は、梁に完成した謝啓が早くも變質を始めていたことを示しているように感じられる。

徐陵の謝啓は、直接的には燭監（盤）を下賜されたことによつて作られた。それは政權の威信に關わる文書作成の功績に對して下されたものであった。しかし文書作成に關する典據が大部分を占めていることから明らかなように、謝啓の重點は下賜された燭監（盤）にはない。六朝の謝啓は、贈られた物や贈るといふ行爲をどのように表現するかに力點があつて、なぜ贈られたかについての説明は必要で

はなかった。それは、詠物詩がなぜそれを題材としたかが問題とされなかったことに同じい。そもそも、サロン文學の特色の一つとして、任意に與えられたテーマを美しく表現するということを擧げることができる。サロン文學において、與えられたテーマの意味を問うことはナンセンスでさへある。

もちろん徐陵のこの謝啓のように、品物が與えられることになった理由を述べ、そしてそのことが實は、作品の目的であつたように感じられる謝啓がこれまでになかつたわけではない。例えば、立太子の祝いとして下賜された絹に對して、徐勉が謝啓を作っている。この謝啓は、ほとんどが太子を譽めることに費やされ、絹についての言及はほんのついたりになつてゐる。²⁴徐勉の謝啓も、立太子という朝廷の重大事に關わつて作られたものであつた。この謝啓や徐陵の謝啓から、相手を譽め稱えるという側面をもつ謝啓に、政治が利用價值を見いだしはじめていたと言えば大げさであろうか。しかし、なぜそれが贈られたのかという理由を説明する部分の付加は、謝啓に新しい要素を加えたといふより、むしろその變質を促す徴候であつたと指摘することは大げさではない。それは、上に述べたようにサロン文學の根幹に關わる問題であるからである。

いまその詳細を検討するだけの準備はないが、唐朝の謝啓は、大きな傾向として、徐陵の謝啓のように、品物が贈られた理由を説明する記述や、示された恩寵への堅苦しい感謝の表明が増えてくるように感じられる。謝啓のこのような描寫の重點の變化や表現の莊重化には、政治的意識の關與が大きいと考えられる。陳における徐陵のこの謝啓は、六朝の謝啓から唐の謝啓への轉換點を示しているように思われる。謝啓のこのような變容は、六朝のサロンの崩壊、初唐における、皇帝を中心とする宮廷文學と登場という、謝啓を支えた基盤の變化と連動していると、私は考えるが、この問題については將來を期したい。

終 わ り に

六朝になつて謝啓が文學の一ジャンルとして勃興したのは、サロンに集つた文學者たちの一體感によつてであつた

と言つてよからう。

謝啓は現在の言葉でいう禮狀であるが、贈られた物に密着した表現や、個人的な喜びを個性的に描寫することは避けられた。むしろ典據を用ひ比較の構文を中心とした常套的な表現手法で、贈られた物や贈るという行爲自體を抽象化して譽め稱えることに重點があつた。謝啓は典型的とも言える駢文で綴られ、韻文における詠物詩と基盤を一にしてこの時期盛行した。ただ、詠物詩がテーマを通して物語を展開するという特色を持つのに對し、謝啓はその物や行爲がもつ優秀さを説明しようとする點に大きな違いがあつた。

サロンという文學空間で、そこに參加する人々の共通認識によつて支えられたジャンルであつたがゆゑに、基盤となるサロンの崩壞によつて、謝啓は變容してゆく。庾信のような自身の喜びを語るといふ謝啓は、文學史の中を伏流水となつて流れ、近代になつて突如再出現する。しかし直接には、物品が贈られたことの意味を強調し、相手の恩寵を廣く顯彰するという方向で謝啓は生き残つてゆく。ただ

六朝の謝啓について（道坂）

しそれは、贈られた物や贈るという行爲に表現を集中させた六朝の謝啓があえて言及しなかつた部分であつた。

詠物詩や謝啓において、テーマは常に外から突然與えられる。そのテーマについて、それぞれのジャンルがもつ暗黙の約束に従つて表現することが、詠物詩、更には謝啓の意義であつた。その了解事項は、庾信の謝啓が忌避されたことに示されるように、個人的事情を表現しないという、サロン文學の作法とも言える規範意識に裏付けられていた。徐陵の謝啓から考えると、その作法は政治的目的とでも呼ぶべき意識の介入によつて、テーマの説明、個人に與えられた恩寵の顯彰という形で破られたのであつた。庾信と徐陵の謝啓は、謝啓の新しい方向性を示したと云うこともできる。しかし實は、謝啓が基盤とした六朝のサロンの崩壞を意味するものでもあつたのである。

謝啓は六朝という時代によつて生み出され、六朝という時代に殉じたジャンルであつたと言へるのではないだろうか。

註

- ① この現象については、既に矢嶋美都子氏が「庾信の蒙賜酒詩について」(『日本中國學會報』三四(一九八二年)、のち『庾信研究』(明治書院 二〇〇〇年)で指摘している。
- ② 『文苑英華』が謝啓の項を立てているのが、謝啓をジャンルとして認めた早い例ではないだろうか。そこでは啓の下に謝官・謝辟署・謝寶賜といった謝啓の子目を立てられている。但し、表の部でも啓以上に内容別により細分化して謝表の項が立てられている。なお、近代において、書簡文については内田道夫「書簡文について——中國文章史ノート——」(五——『集刊東洋學』一九六六年)、福井佳夫「六朝書簡文小考」(『六朝麗指』汲古書院 平成二年)などの論文があるが、謝啓について考察したものは、管見の限り見あたらない。ただ、趙樹功『尺牘文學史』(河北人民出版社 一九九九年)に多少の言及がある。
- ③ 啓がいつ出現したか、また特に政治的文章としてどのような役割をもっていたかについては、中村圭爾「三國兩晉における文書「啓」の成立と展開」(『古代文化』一九九九年)に考察がある。ただ、小論は啓そのものについては考察の対象外とし、禮狀としての謝啓についてのみ考察する。
- ④ 例えば、明治以降の作家の全集には書簡の部があり、禮狀も多數載録されている。それらが資料的價值を持つことは否定しないが、なかには極めて儀禮的なものや親密な友人宛ゆえに讀者からすれば暗號のような手紙までさまざまなが含まれている。どの作家の全集においても、そのような、讀者を意識して書いたとは思えない禮狀が多數ある。
- ⑤ 他に「惠野鴨一双、秋來未得、始是嘗新。遠能分遣、但佩戴。耶、二謝」(『嘗新帖』)「三王帖」も禮狀であるが、誰に出したかは分からない。
- ⑥ このことについては、日中の學者に指摘がある。例えば、入谷仙介『古詩選』(朝日新聞社 一九六六年初版)。
- ⑦ 「王夷甫雅尚玄遠、常嫉其婦貪濁。口未嘗言錢字。婦欲試之、令婢以錢遶牀、不得行。夷甫晨起、見錢闔行、呼婢曰、與却阿堵物」(『世說新語』規箴篇)
- ⑧ 「玉露」は秋の美しい露、「金液」は「其次藥有丸丹金液」(『藝文類聚』八一所收『漢武內傳』)や「金液太乙所服而仙者也」(『抱朴子』內篇・金丹)とある。最も清淨なものよりもっと清らかであり、仙人になれるという飲み物より素晴らしい味わいというだけである。頂いた柿、それ自體についての味わいを表現しているわけではない。
- ⑨ 左思「蜀都賦」に、蜀の地勢を「靈關以爲門」と靈關を蜀への入り口とし、蜀の特産品のなかに紫梨を挙げている。また、謝朓「謝隨王賜紫梨啓」に「味出靈關之陰」とある。
- ⑩ 「足使萍實非甜、蒲萄猶甜」(庾肩吾「謝湘東王資甘啓」)も、「瓜賦」を意識し、言葉逆にして、表現の面白さをねらったのであろう。

⑪ 「鄴殿」の句は、未詳。他は歷朝の紙を列舉している。

⑫ 「梁書」〈處士・陶弘景傳〉に「太通初、令獻上二刀於高祖、其一名善勝、一名威勝、竝爲佳寶」とある。

⑬ 「皇太子初拜、給漆筆四枝、銅博山筆牀副」(『藝文類聚』五八所引「東宮舊事」)。

⑭ 出典となったのは、齊の景公と晏嬰の以下の會話である。

「景公欲更晏子宅、曰、子之宅近市、湫隘囂塵、不可以居。請更諸爽塏者」(『春秋左氏傳』昭公三年)。なおこの會話は、邸宅が贈られることに對する謝啓には必ずといってよいほど典據として用いられる。本文で述べる、安定した表現の一種と言える。

⑮ この表は他に「太平御覽」にも載録されている。小論は基本的に謝啓を考察の對象としているが、禮狀という觀點から曹植のこの表を謝啓の先聲と考えた。附録参照。また、啓と表の目的の近似について「文心雕龍」に言及があることは、本文で指摘した。

⑯ 隨郡王は蕭子隆。「子隆在荊州、好辭賦、數集僚友、眺以文才、尤被賞愛」(『南齊書』謝朓傳)。竟陵王は蕭子良。所謂「竟陵王の八友」など、文學者を集めたことは有名である。興膳宏編『六朝詩人傳』(大修館書店 二〇〇〇年)「沈約」の項を参照。

⑰ 詠物詩については網祐次「中國中世文學研究」(新樹社 一九六〇年)、小尾郊一「中國文學に現れた自然と自然觀」

六朝の謝啓について(道坂)

(岩波書店 一九六二年)などを参照。

⑱ 例えば庾肩吾の「答(「初學記」作謝) 武陵王寶綰啓」は『藝文類聚』「初學記」とともに載録している。「肩吾啓。蒙寶綰二十疋。〈清河之珍、丘(「初學記」作邱)園暫其束帛、關東之妙、潛織陋其卷綰。〉下官謬眷扁舟、暫瞻還旆。而天人渥盼、增餘論之榮、江漢安流、無沂泗之阻。〈遂使鶴露膏凝、輕絺立變、鴈風朝急、冶服成溫。〉有謝筆端、無辭陳報。不任下情。謹奉啓事、謝聞。謹啓」。原文は以上のようなのであるが、『藝文類聚』が載録しているのは、このうち、()内の計八句の詠物的表現の部分だけである。

⑲ 「國清百録」や「弘明集」「廣弘明集」など、佛教關係の文集にも多くの謝啓が録されている。しかしそれは文學觀とは別の觀點から載録したと考えられる。一方、『文選』や『文心雕龍』に謝啓が載録されていなかったり、謝啓についての言及がないことは、謝啓が、それらが編纂された梁に發展した、當時における新興のジャンルであったことを示しているのではないだろうか。

⑳ 「隋以前遺文祕籍、迄今十九不存、得此一書、尙略資考證」(『四庫全書總目提要』子部・類書類一「藝文類聚」、また「在唐人類書中、博不及藝文類聚、而精則勝之」(同「初學記」)とあり、『藝文類聚』が文學に果たした貢獻として、唐以前の作品を廣く採集保存したということを指摘している。『藝文類聚』(上海古籍出版社 一九八二年)所收「藝文

類聚索引」(李劍雄・劉德權 編)による。

②② 庾信がなぜこのような謝啓を作ることができたかは、彼の北朝での立場や精神状況とも關わり、庾信の文學全體のなかから考える必要がある。但し、ここでは彼の内面には立ち入らず、謝啓の表現についてのみ考察する。

②③ この謝啓が作られた時期はわからない。劉孝儀の傳によると、彼は何度か地方官として赴任しており、この作品は、地方にあってサロンでの文學活動に加われなかつた時期に書かれたのであろう。劉孝儀の謝啓だけでは分からないが、或いはサロンに居るものは詠物詩を作り、居ない者は謝啓を作るという文學的慣習があつたのではないかと想像している。本文で紹介した、梁武帝の詩に對する、庾肩吾の和詩と梁簡文帝の謝啓の例とともに、詠物詩と謝啓の關係を考察する上で興味深い作品である。なお彼が兄の劉孝綽らとともに、晉安王、後の簡文帝のサロンに所屬したことは、森野繁夫『六朝詩の研究』(第一學習社 昭和五一年)に指摘がある。

②④ 徐勉の「謝敕賜絹啓」は以下のものである。「臣勉言、傳

【附録・謝啓一覽】

*以下は漢から陳・隋までの謝啓の一覽である。但し、謝啓というジャンルの他に、禮狀という觀點から、啓と近似するジャンルである書・表からも載録した作品がある。

*各篇名は『藝文類聚』『初學記』による。兩書に載録されていない作品は、適宜、嚴可均などの命名に従つた。

詔傳靈惠宣敕、垂賜絹二十疋。伏惟皇太子 睿情天發、粹性玄凝。作震春方、繼離朱陸。嘉日茂辰、畢宮告始。龍樓起曜、博望增華。含生晁藻、率土抃躍。臣連屬會昌、命逢多幸。預奉休盛、復頒恩錫。白素起獨麗之色、兼兩邁邱園之貢。慶荷之情、實百常品。不任下情、謹奉啓謝聞。謹啓。」(『初學記』二七)。なお、沈約に「謝立皇太子賜絹表」がある。これも同じ時の作品と思われる。徐勉の「啓」、沈約の「表」が本來のままであるなら、先に引用した曹植の文と同じく、啓と表は用途が重なっていたということがわかる。

*小論は二〇〇四年十一月、東京斯文會館で開催された六朝學術學會において、「詠物の文——六朝の謝啓について——」と題して發表した内容に、大幅に加筆したものである。司會の勞をとつて下さつた矢嶋美都子先生をはじめ、多くの先生方に有益な助言を頂いた。この場をかりてお禮を申し上げます。

*考察の対象とした謝啓の他に、敘任の禮狀など、本文でいう公的な禮狀も含まれている。
 *遺漏が有るであろうが、この一覽でも、小論で取り上げた謝啓が、東晉に入つて現れ、南齊になると公的禮狀を量的に凌駕していることがわかる。

【前漢】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
哀帝	上書謝爲皇太子			『漢書』哀帝紀
霍光	病篤上宣帝書謝恩			『漢書』霍光傳
匡衡	告謝毀廟			『漢書』韋玄成傳
張博	報謝淮陽王			『漢書』宣元六王傳
谷永	謝王鳳書	三三		『漢書』谷永傳
諸葛豐	上書謝恩			『漢書』諸葛豐傳
閻崇	皇太子謝爲所生立後議			『漢書』外戚下・孝元傳昭儀傳
王莽	謝益封國邑			『漢書』王莽傳上

【後漢】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
盧芳	上疏謝封代王			『後漢書』盧芳傳
桓榮	上疏謝皇太子			『後漢書』桓榮傳
張俊	假名上鄧太后書謝減死	五四		『後漢書』袁敞傳附

六朝の謝啓について（道坂）

皇甫規	追謝趙壹書		『後漢書』趙壹傳
張奐	奏記謝段穎		『後漢書』張奐傳
蔡邕	巴郡太守謝表		本集・『太平御覽』七〇三
趙壹	窮鳥賦并貽友人書謝恩	九〇	『太平御覽』三五〇・四八六
阮瑀	謝曹公牋		『文選』註

【三國】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
曹操	謝龔費亭侯表	五一		『太平御覽』六八〇
	謝置旄頭表			『三國志・魏志』武帝紀註
	上書謝策命魏公			『三國志・魏志』文德郭后傳註
文德郭后	謝上表			
曹植	改封陳王謝恩章	五一		
	封二子爲公謝恩章	五一		
	謝初封安鄉侯表	五一		
	謝封鄧城王表	五一		
	謝得入表	三九		
	謝周觀表			本集
	謝鼓吹表	六八		

	轉封東阿王謝表	五一		
	謝妻改封表	五一		
	入覲謝表			本集『太平御覽』四六七
	謝賜柰表	八六		本集『太平御覽』九七〇
	謝賜穀表			本集
曹洪	上書謝原罪			『三國志・魏志』曹洪傳註
鍾繇	謝曹公書			『太平御覽』八五八
劉廙	上疏謝徙署丞相倉曹屬			『三國志・魏志』劉廙傳
	謝劉表牋			『三國志・魏志』劉廙傳註
王昶	謝榮表			『太平御覽』六八一
桓範	兗州刺史謝表			『太平御覽』二五五
孫策	明漢將軍謝表			『三國志・吳書』孫討逆傳註

【晉】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
王衍	謝表			『北堂書鈔』二二八
孫楚	謝賜障日牋			『太平御覽』六八七
華嶠	散騎常侍謝表			『太平御覽』一二四
	祕書監謝表			『通典』二六『太平御覽』三三三

六朝の謝啓について（道坂）

陸機	謝吳王表			『太平御覽』二五五
	見原後謝齊王表			『太平御覽』三二〇
	謝平原內史表			『文選』三七
	謝成都王牋			『文選』註
劉琨	謝拜大將軍都督并州表			『晉書』劉琨傳
孔坦	謝賜酒柑表			『太平御覽』九六六
姚嵩	謝賜皇后所遺珠佛像表			『廣弘明集』二一 『十六國春秋』六〇

【宋】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
劉義恭	謝(賜)金梁鞍啓		一二一	『太平御覽』三五八
	啓(謝敕賜華林園櫻桃啓)	八六		傅咸「粘蟬賦」と重なる
	謝(敕賁華林園)柿啓啓	八六		『太平御覽』九七一
	啓事(謝賜交州檳榔啓)			『太平御覽』九七一
王弘	謝賜河上梨表			『太平御覽』九六九
謝靈運	謝封康樂侯表	五一		
謝莊	爲北中郎謝兼司徒章	四七	一一	『太平御覽』二〇八
	謝賜貂裘表		二六	
顏延之	謝子竣封建城侯表	五一		

袁淑	謝中丞章		『太平御覽』三二六
鮑照	解褐謝侍郎表		本集
	謝秣陵令表時爲中書舍人		本集
	謝隨恩被原表		本集
	謝解禁止		本集
	謝賜藥啓		本集
	謝永安令解禁止啓		本集
	謝上除啓		本集
	謝假啓		本集
	謝假啓		本集
顔測	大司馬江夏王賜絹葛啓		『太平御覽』八一九

【南齊】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
王融	拜秘書丞謝表		一一一	
	謝武陵王賜弓啓	六〇	一一二	『太平御覽』三四七
	謝敕賜御裘等啓	六七		
	謝竟陵王賜納裘啓	六七		
	謝竟陵王示扇啓	六九		

六朝の謝啓について（道坂）

謝朓	謝司徒賜紫鮮啓	七二		
	謝敕賜米啓	七二		
	謝安陸王賜銀鉢啓	七三		『太平御覽』七五九
	謝竟陵王示法制啓	七七		
	謝賜珮啓		二六	
孔稚珪	謝賜生荔支啓	八七		
	爲王敬則謝會稽太守啓	六		
(謝)隨王賜左傳啓		五五	一一	
	謝隨王賜紫梨啓	八六	二八	『初學記』は「謝梨啓」

【梁】

蕭綱 (簡文帝)	作者	篇名		『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
	蕭綱	謝賜新曆表		五		
		謝爲皇太子表		一六		
		拜皇太子臨軒竟謝表		一六		
		謝東宮賜裘啓		六七	二六	
		謝東宮賜柿啓		八六		
		謝邵陵王禁錮啓		五四		
		謝敕示苦旱詩啓		一〇〇		

謝敕齋中庸講疏啓	五五		
謝敕資方諸劍等啓	六〇	二二	『太平御覽』三四四
謝敕資善勝威勝刀啓	六〇	二二	『太平御覽』三四六
謝敕賜玉珮啓	六七	二六	
謝資扇啓		二五	
謝資（碧慮）棋子屏風啓	六九	二五	
謝敕資織竹火籠啓	七〇		
謝敕資益州天門冬啓	八一		
謝敕資貂坐褥席啓	九五		
謝敕資長生米啓	七二		
謝上降爲開講啓			『廣弘明集』一九
重謝上降爲開講啓			『廣弘明集』一九
謝開講般若經啓			『廣弘明集』一九
謝敕使監善覺寺起刹啓			『廣弘明集』一九
謝御幸善覺寺看刹啓			『廣弘明集』二六
謝敕資銅供造善覺寺塔露盤啓			『廣弘明集』二六
謝敕資柏利柱并銅萬斤啓			『廣弘明集』二六
謝敕資錢并白檀香充法會啓			『廣弘明集』二六
謝敕資苦行像并佛跡啓			『廣弘明集』二六

六朝の謝啓について（道坂）

蕭 繹				
(元帝)				
謝敕賜第啓	六四	二四	【廣弘明集】二六	
謝敕參迎佛啓			【廣弘明集】二八下	
謝敕爲建涅槃懺啓			【廣弘明集】二六	
謝敕使入光嚴殿禮拜啓			【廣弘明集】二八	
(謝)敕聽從舍利入殿禮拜啓	七七		【廣弘明集】二八上	
又謝資納袈裟啓			【廣弘明集】二八上	
謝資納袈裟啓四篇				
謝賜錢啓	六六			
謝敕賜解講錢啓	六六			
爲姜夏王豐謝東宮寶錦啓	八五			
謝東宮寶錦局啓	七四			
謝東宮寶陸探微畫啓	七四			
謝上畫蒙敕褒賞啓	七四			
謝東宮寶花釵啓	七〇			
謝敕賜綰啓	七〇			
謝東宮寶寶枕啓	七〇			
謝東宮賜麈尾錦帔團扇等啓	六九			
謝東宮寶紹蟬啓	六七			
謝宮賜白牙鑲管筆啓	五八			

蕭 統				
(昭明太子)				
謝東宮寶辟邪子錦白襴等啓	八五			
謝東宮寶瓜啓	八七			
爲妾弘夜姝謝東宮寶合心花釵啓	八八			
謝晉安王賜馬啓	九三			
謝東宮寶蒸栗牛啓	九四			
謝寶車螯蛤蜊啓	九七			
謝賜功德淨饌一頭啓				
謝寶功德食一頭啓				
謝敕送齊王瑞像還啓	七七			
謝敕寶地圖啓	六	五		
謝敕寶水犀如意啓	七〇			
謝敕寶廣門墻(甌)等啓	七三			『廣弘明集』二一・一に簡文帝の作とする
謝敕寶銅造善覺寺塔露盤啓	七七			『太平御覽』七五九
謝敕寶河南菜啓	八二			
謝敕寶大菰啓	八二			
謝敕寶魏國所獻錦等啓	八五			
謝敕寶邊城橘啓	八六			
謝敕寶看講啓				『廣弘明集』二一
謝敕參解講啓				『廣弘明集』二一

六朝の謝啓について(道坂)

謝敕資制旨大涅槃經講疏啓			【釋藏經】六 【廣弘明集】二二
謝敕資制旨大集經講疏啓			【釋藏經】六 【廣弘明集】二二
謝賜甘露啓		二	
謝令資馬啓	九三		
晉安王謝南兖州章		一〇	
爲安陸王謝荊州章		一〇	
謝賜新麻表	五		
謝封建昌侯表	五一		
謝母封建昌國太夫人表	五一		
爲長城公主謝表	五一		
爲皇太子謝初表	一六	一〇	
謝立皇太子賜絹表	八五		
謝勅賜冰啓	九		
謝賜甘露啓		二	
謝齊竟陵王敎撰高士傳啓	三七		
謝齊竟陵王宋永明樂歌啓	四三		
謝齊竟陵王資母赫國雲氣黃綾裙襦啓	六七		
爲東宮謝勅賜孟嘗君劍啓	六〇		【太平御覽】三四四
爲皇太子謝賜御所射雉啓	六六		

江 淹	謝司徒賜北蘇啓	七二		
	謝賜軫調絹等啓	八五		
	謝安出門宮賜絹綺燭(獨)啓	八五		劉孝儀と同文
	謝勅賜絹葛啓	八五		
	謝賜交州檳榔啓			『全梁文』
	爲柳世隆謝賜樂遊胡桃啓	八七		
	謝齊竟陵王示華嚴環珞啓	七七		本集
	蕭太傅謝追贈父祖表			本集
	謝開府辟召表			本集
	(爲)齊王謝免旒諸法物表	六七		本集
任 昉	建平王謝賜石硯等啓			本集
	建平王謝玉環刀等啓			本集
	蕭太尉子姪爲領軍江州兗州豫州淮南黃門謝啓			本集
	爲王金紫謝齊武帝示皇太子律序啓	五四		『文選』三九
	爲卞彬謝脩卞忠貞墓啓			
范 筠	謝示璧表	八四		
袁 昂	謝後軍臨川王參軍事啓			『梁書』袁昂傳
徐 勉	謝敕賜絹啓		二七	
王僧孺	謝賜麻表	五		

六朝の謝啓について(道坂)

王孺	謝齊竟陵王使撰忍書啓	五五		
	謝賜于陞利所獻檳榔啓	八七		
陸倕	爲張纘謝兄尙書諡靖子表	四〇		
	張侍中(謝)啓	四八		
	敕使行江州事啓	五〇		
	爲息纘謝敕賜朝服啓	六七		
丘遲	爲范雲謝示毛龜啓	九九		
	謝爲東宮奉經啓	五五	一	
劉孝綽	謝西中郎諮議啓			〔梁書〕劉孝綽傳
	謝東宮啓			〔梁書〕劉孝綽傳
	謝安成王寶祭孤石廟胙肉啓	七二		
	謝晉安王餉米酒等啓			〔茶經〕
	謝給藥啓	八一		
	謝越布啓	八五		
劉孝儀	爲王儀謝國姻啓	四〇		
	謝東宮賜五色藤筵蹄一枚啓			〔北戶錄〕
	謝女出門官賜紋絹燭啓		二五	沈約同文。
	除建康令謝啓	五〇		
	爲晉安王謝東宮賜玉環刀啓	六〇		〔太平御覽〕三四六

劉孝威	爲王儀同謝宅啓	六四		
	爲武陵王謝賜第啓	六四		
	謝晉安王賜銀裝絲帶啓	六七		
	謝始興王賜花紈簾啓	六九		
	謝東宮賁酒啓	七二		
	謝晉安王賜宜城酒啓		二六	
	謝晉安王賁蝦醬啓	七二		『太平御覽』八六二
	謝鄱陽王賜銀鉢啓	七三		
	謝宮賜城傍橘啓	八六		
	謝晉安王賜甘啓	八六	八	
	謝始興王賜柰啓	八六		
	爲晉安王謝賜鵝鴨啓	九一		
	謝豫章王賜馬啓	九三		
劉孝威	謝始興王賜車牛啓	九四		
	謝豫章王賜牛啓	九四		
	謝賁官紙啓	五八	二二	
	婚謝晉安王賜錢啓	六六		
	謝敕賁畫屏風啓	六九		
	謝賁錦被啓	七〇		『太平御覽』七〇七

六朝の謝啓について（道坂）

張 纘	謝東宮賜聖僧餘饌啓	七二		
	謝東宮賜淨饌啓	七二		
	謝東宮寶鹿脯等啓	七二		『太平御覽』八六一
	謝東宮寶炭啓			『漢魏六朝百三家集』
	謝東宮寶藕啓	八二		
	謝賜奈啓		二八	
	爲皇太子謝敕寶功德馬啓	九三		
	謝熊白啓	九五		
	謝寶林檎書	八七		
	謝南康王饌牛書	九四		
	謝東宮寶園啓	六五		
	謝皇太子寶果然褥啓	九五		
庾肩吾	爲武陵王(謝)拜儀同章	四七		『太平御覽』二四三
	謝曆日啓	五		
	謝寶銅硯筆格啓	五八	二	
	謝東宮賜宅啓	六四		
	謝東宮古跡啓	七四		
	謝東宮寶內人春衣啓	六七		
	謝東宮寶米啓	七二		

任孝恭	謝湘東王寶米啓	七二		『白孔六帖』
	謝寶炭啓			
	謝寶粳米啓	八五		
	謝湘東王寶米啓	八五		
	荅陶隱居寶朮桎啓	八一		
	謝寶菱啓	八二		
	謝(答)武陵王寶絹啓	八五	二七	
	謝武陵王寶白綺綾啓	八五		
	謝寶梨啓	八六		
	謝湘東王寶甘啓	八六	二	
	謝寶橘啓	八六	二	
	謝蒙寶朱櫻啓	八六		
	謝東宮寶栗啓	八七		
	謝寶林橘啓	八七		
	謝寶檳榔啓	八七		
任孝恭	謝東宮寶檳榔啓	八七		
	謝寶錢治宅啓	六六		
	謝裙襦啓	六七		
	謝示園基啓	七四		

六朝の謝啓について(道坂)

【陳】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
周弘正	謝梁元帝寶春秋糊屏風啓	六九		
	謝梁元帝寶玉門棗啓	八七		
	謝敕寶烏紗帽等啓	六七		
	謝東宮賜縠袍啓	六七		
	謝敕寶紫鮮啓	七二		
徐陵	謝兒報坐事付治中啓	五四		
	謝敕賜祀三皇五帝餘饌啓	七二		
	謝敕寶燭監(盤)賞荅齊國移文啓	八〇		
	謝寶麝啓	九五		
	謝寶蛤啓	九七		
	謝東宮寶蛤蛸啓	九七		
	謝敕寶烏賊啓	九七		
張正見	(謝賜)錢啓		二七	

【北周】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
王褒	謝寶絹啓	八五		

庾 信			
謝寶馬啓	九三		『文苑英華』六五五
謝明皇帝賜絲布等啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶絲布等啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶絲布啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶息糸布啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶白羅袍袴啓	八五		『文苑英華』六五五
謝趙王寶犀帶等啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶米啓	七二		『文苑英華』六五五
謝趙王寶乾魚啓			『文苑英華』六五五
謝趙王寶雉啓	九〇		
謝趙王寶馬并繖啓			『文苑英華』六五五
謝滕王寶巾啓			『文苑英華』六五五
謝滕王寶馬啓	九三		『文苑英華』六五五
謝滕王寶猪啓			『文苑英華』六五五
謝滕王集序啓			『文苑英華』六五五
謝趙王示新詩啓			『文苑英華』八五六

六朝の謝啓について（道坂）

【隋】

作者	篇名	『藝文類聚』	『初學記』	その他・備考
江總	爲陳六宮謝章	一五	一〇	
	爲陳六宮謝表	一五		
	謝敕給鼓吹表	六八		
	(爲)太保蕭公謝儀同表	四七		『太平御覽』二四三
	除詹事謝宮啓	四九		
	謝宮爲製讓詹事表	四九		
	除尙書令謝臺啓	四八		
魏澹	謝陳主餞送啓			『隋書』潘徽傳
楊素	謝煬帝手詔問勞表			『隋書』楊素傳
王貞	謝齊王素文集啓			『隋書』王貞傳
突厥	上表謝恩			『隋書』突厥傳
啓民可汗	上表陳謝			『隋書』突厥傳
	荅晉王書謝度人出家			『國清百錄』
釋智顗	荅謝晉王施物書			『國清百錄』
	謝晉王遣使弔天臺山眾啓			『釋藏起』『國清百錄』
	謝晉王爲師智顗設周忌啓			『國清百錄』
釋智越	謝皇太子造天臺山下寺成啓			『國清百錄』

謝皇太子施香爐銅鐘等物啓			【國清白錄】
謝皇太子施勝旛法衣等物啓			【國清白錄】
謝敕施物啓			【國清白錄】
謝敕賁國清寺名并施物度僧啓			【釋藏起】國清白錄】

六朝の謝啓について（道坂）